

Management Club Report

Mar.2020/Vol.209

Monthly Opinion 《幸福度は対人関係能力に比例》

「役に立つ仕事はそれ自体が喜びであるようだ。その喜びは、その仕事から利益を得られるからではなく、その仕事そのものに起因しているのである」(『アランの幸福論』齋藤慎子訳・ディスカバー・トゥエンティワン刊) フランスの哲学者アランの言葉です。

仕事を終えて代金を受け取った側が「有難うございました」と言うのは洋の東西を問わず人間社会における当然の礼儀ですが、お金を支払う側である顧客が「有難うございました」というケースも珍しくはありません。それは顧客の期待感が満たされその仕事が大変役に立ったことを表しており、仕事をした側にとっては金銭的な利益を得たこと以上に大きな喜びを感じることとなります。そのようなとき、アランのこの言葉の意味を実感することができるのではないのでしょうか。

どのような仕事であれ、このように人々の役に立つ仕事は価値のあるものですが、とりわけ医療に関わる仕事はその喜びを大きく感じることができます。医療機関においては「患者」と呼ばれる顧客のほうで、上記のように「有難うございました」と言う比率が断然高くなっています。しかも、一般の仕事の場合は、お金を受け取った側が発する「有難うございました」に対する返礼として使われるケースが多いのですが、それとは異なり、顧客側から先に「有難うございます」と言う点が医療なのです。

歯科医院に従事する人たちは、このように人々の役に立ち、有難く思われる仕事に就いていますので、その境遇を自身の幸福度を高める方向に大いに生かしてもらいたいものです。歯科医療従事者の幸福度の高まりがそのまま来院者への医療サービスの品質向上に繋がることで、来院者の幸福度を高めることに発展していくからです。今月は、幸福度の分析結果などから理解を深めることができた幸福度を高めるためのポイントについて述べて参ります

1

人との繋がりを求めながらその難しさにたじろぐ

歯科医療従事者の幸福度を高める共通因子

歯科医院で働く人だけに表れている特徴ではないかもしれませんが、これまで行ってきた歯科医療従事者からの自己評価結果からは、明らかに一つの傾向が見えてきます。